黒い陽

有森信二

一

気が遠くなるほどどこまでも続く一本の道を、男の後に従い歩いていた。もう、半年も、一年も同じ道を歩いているのではないかと思われるほど疲れ果てているのだが、実際はまだ六日目の朝を迎えたばかりだった。

今日も暑くなりそうだった。陽は、地平線の彼方に没した街の方角からじわじわ上り始め、あたり一面に生えた産毛に似た草の葉をだいだい色に染め上げて行った。

行く手に、細長く尖った自分の影を見てさえ、今日の暑さが十分想像出来た。陽をさえぎるものは何もない。頼りは、腰につけた水筒が一つと、くたびれたパナマ帽が一つあるだけだ。

行く先はわかっている。街に住む者誰もが、いつかこの道を歩き、男の導くところまで、幾日、幾晩かかろうとも辿り着かねばならない。その日が来ることは歩き始めたばかりの幼児でさえ知っているし、なにより、この歳になるまでこのときに備え、繰り返し学習してきた。

私の前を行く男は、白く翻る衣を着けているが、獄卒ではない。鬼神や仙客の類いでもない。

彼は、私。私自身である。一人の私と、後に従うもう一人の私。

その証拠に、男の伸びた顎髭は私と寸分違わない長さだし、左手人差し指の第二関節から先は同じ形に捩れている。私が小さい頃、誤って玄関の扉に挟み、すんでのところで指先を失うところだった傷の名残である。

とはいえ、二人の私は完璧に私そのものというわけではなく、先に立って絹の衣をなびかせている方が私の〈兄貴格〉に当たり、後に従っている私は、いわば〈弟格〉ということになる、と言えば当たっているだろうか。

私は（私たちは）、お互いを区別する必要から、先の私を〈上の私〉、後の私を〈私〉と呼んでいる。そうしておいた方が、この道の終点に至ったときに好都合だと、掟に定められている。

「お前も難儀なことだ」

上の私が立ち止まり、額の汗を拭った。

「まさかとは思っていたが、そのまさかだった」

「掟というのは厳しいもんだ。選りに選って、こんな大変な時期に役目が回って来るなんて」

「お前は、われわれの中では、先にヒトに生まれ、つい以前にも生まれた。それが、引き続いて、またヒトに生まれねばならんとは」

上の私の顎髭が、折からの風に揺れた。

「しかも、お前がちょうど二十の歳に、未曾有の天変地異が起こる」

「それを、目の当たりにせねばならん」

「肉親たちが火に焼かれ、打ち砕かれる。その様を見届けた上で、自らも海中深く沈んでしまう」

「わかっている。わかった上で行くのだ」

私は、何度繰り返してきたかしれない台詞をまたも吐き、溜め息を付く。

わかっているのだ。そのことの細部の細部まで知悉し、ときどきに叫ぶ悲鳴まで決まっている。地が躍り、海が裂けるとき、人々の身に何が起こるか。私のなすべきことは何か。全て学習済みなのだ。

みんなわかっている。ということは、私以外の者もみんなわかっているということに他ならない。十年も前から飽きるほどリハーサルを繰り返してきたし、何百回も溜め息を付いてきた。とりわけ、私の恋人となるリンダとは、リハーサルの度に涙を溜め、あまりの掟の無慈悲さを嘆き合ってきた。

しかし、考えようによっては、わずか二十年で今度の役目から解放されることになる。

そして、少なくとも今後数千年間、ヒトは地上から種を断ったも同然の状態になるのである。

空（正確には「天」という）では数千年などほんの束の間でしかないのだが、どの種にとっても、たまに与えられる休養ほど嬉しいものはない。ヒトとして生まれるためのすしずめのリハーサルもなければ、競争も勤労奉仕もない。

地上からヒトというヒト全てが絶え、焼け跡の一角から現れた肉食獣たちが地を継いで悪戦苦闘する様を、高見の見物よろしく眺めていさえすればいい。彼らが一朝の栄華を謳歌し、ために争い、互いの血と血をすすり合う様を。

勿論ヒトが地を継いでいる間も、血で血を洗う争いは絶えることはない。絶えないどころか、どれだけ効率的に相手を殺戮するか、というシナリオだけが選びとられ、演出されて行く。肉食獣の場合も、ヒトの場合も、演じることの内容にたいした差はない。

そのヒトの時代、いやヒトの舞台が、あとわずか二十年で一応幕を閉じる。私やリンダは、最後の舞台の幕を降ろすために出演することになったエキストラだ、とでも言ったら当たらないだろうか。

「地上に下りたった途端、十年もの間汗にまみれて学んで来たことを、全く忘れてしまうというのは、どうしてだ」

と上の私。上の私は、表情こそムッツリしているが、本来なら彼の順番であったのが急遽私に出番が回って来たため、少なからず胸を撫で下ろしている。なにしろ、順番が

正式に決まるまでの間の彼の動揺といったらなかった。
　前生―地上の暦でいえば、およそ五百年前のことになるが。その私の最期のとき、地上に恨みを残さずにいたのなら、順当に上の私に出番が巡る筈だった。それが、一つの領地を治める長であった私は、にわかに東方に起こった盗賊まがいの一党の奇襲に遭い、必死に抵抗したにもかかわらず、一族郎党そろって手の平に穴を穿たれ、あばれ馬の背にぶら下げられ領内を引き回された挙げ句、十五代にわたって守り続けた家、領地をことごとく焼き滅ぼされてしまったのである。断末魔の私は、百度生まれ変わろうとも、必ずやこの者たちに復讐してやる、と声をふりしぼりながら息絶えたのだった。
　今にして思えば、地上での焼き討ちなど痛くも痒くもない出来事であるし、まして、復讐のためにわざわざ地に下りるなど、愚にもつかぬことであると、大意識（空を治める最高位のものの呼称である）の元に、何度自らの過ちを取り下げてもらおうと出向いたことであろうか。
　私たちは、本来の住まいである空のこの街にあって、喜びのときも悲しみのときも、街一番の高台にある社殿に額ずき、祈るのである。大意識が何者であるのかは知らないが、額ずき、深く祈っているうち、体を震わすほどの声が降ってくる。
「お前は、どうにも拭い去れないほどの強い思いを地上に残してきた。このままでは、放出されたエネルギーのやりくりがつかん。後に延ばせば延ばすほど、それは取り返しのつかないものになる」
　というわけで、今度また私がヒトとして生まれることになった。しかも、ヒトの種の幕が降ろされようとする、まさにそのときに。
「お前の残してきた念のエネルギーを、うまくいけば相殺することが出来るかもしれん。いや、相殺せねばならん」
　大意識は、鼻先をふむふむと蠢かしながら、大きなくしゃみを三つとばした。

「暑いな。それにしても」
　上の私が、南天の杖にもたれかかり、立ち止まった。衣の袖で、額から首筋にかけ何度も汗を拭う。
「見渡す限り、木陰一つない」
　上の私は、腰の水筒の蓋を開け口を付けた。六日目になるというのに、どこにも終着の地が見える気色はない。水筒の水は、振ればたよりない音をたて始めている。
　この行程に入ってからというもの、口に出来るものは水筒一杯の水だけであり、身に着けられるものは、白い絹の衣一枚に、パナマ帽、サンダルと決まっている。
　街の高所に住むヒトも、路地裏に住むヒトも全て等しく、いつかこの道のない道を、自らの影だけをたよりに歩

かねばならない。勿論、十年も前から、行程に入る場合に備え、陽の高さと影の長さの計り方、道程に応じた水分の摂り方など、考えられ得る限りのオリエンテーションと、リハーサルを受けることになっている。
　にもかかわらず、七日足らずで行程を終える者もあれば、二週間近くを要する者まで、大きなバラつきがある。
　場合によっては、行程の中途で餓死したり、砂原をさんざん迷った挙げ句、（運よく）通りかかった同じ行程の者に発見されたりするなど、挙げればきりがないほどの奇天烈なコースを辿る。平均すれば、約十日の道程でしかないのだが、途上、単に砂原を歩くという以上の加重がかけられてくることも、皆知っている。
　加重がかけられるのは二人の中の一人、つまり地上に下りる一人にであり、であるから、二人の連携をうまく保たねばコースを歩き通し得ないことは無論、下手をすると自分で自分をなぶり殺す羽目に陥らないとも限らない。
　加重というのは、六日、七日と日を追うに従い、本人の内に蓄積されたオリエンテーションで学んだこと、リハーサルで済ましたこと、大意識のこと、果ては自分自身やその分身の存在に至ることまで、全てが身内から除き去られ、抜き去られて行くのである。
　そのときの苦しみといったらない。錐の先で脳髄を掻き回されるがごとく、ナイフで臓物を切り刻まれるがごとく、舌の根をしゃにむにむしりとられるがごとくという、幾重もの波状の痛みが全身をわななかせ、貫いて行く。
　そうした、完璧な漂白がなされて始めて、地上に下り立つための最終地点に辿り着く。
「家のこと、覚えているか」
　上の私が聞いた。多分、私への加重がどの程度進んだかを聞き、反応のいかんで道程がどのあたりにあるかを知ろうというのだろう。
「覚えているよ。母が力の限りに抱き締め、狂わんばかりに私の名を呼んだ。そうして、もはや動くことのない私にとりすがり、この道に出るための花片に被われた白いカプセルに乗せられるまでの間、夜も昼も泣き通しだった。父も、カプセルが飛沫をあげて急流を下り、滝壺に飲み込まれるまで、肩を震わせていた」
　上の私が、もういいというふうに私を遮った。
　私の脳裏には、もっともっと明瞭な記憶が、清澄な水の面を見るがごとくにある。

　まだ小学校に上がったばかりの私の手を引いて、よく母は外出した。父も一緒だった。父は愛用の車に私たちを乗せ、表隣の街のデパートに連れて行ってくれた。デパートには、私の好きなおもちゃがたくさんあった。
　異星に住むという、ヒトの仲間であるQちゃん人形。ゲ

ームの世界での人気者、カルデル。水晶細工のミニカレンダー。耳に付ければ、言葉なしで会話の出来るイヤホーンなどなど。私は、父と母がベンチでコーヒーをゆっくりと飲む間、おもちゃのなかを夢中で行ったり来たりした。

特に水晶細工のミニカレンダーは、覗き込む角度の加減で、時間の中を自在に走ることが出来た。五千万年前、千年前、百年後、五百年後、一億年後。それらの内容は、すべて小学校のテキストにも載っていることで、特別真新しいものではなかったし、もちろん中身が蝋人形で出来ているということも説明されているのだったが、くるりくるりと移り変わる時々の風景に出会う度に、いつも新鮮な気持にさせられた。

五千万年前も、一億年後も、変わることのない、まるで吹く風にそよぐ木々の葉といった風景なのだ。

芽吹きの時期であったり、紅葉の時期であったり、あるいはまた、息づくものが根こそぎ途絶えてしまい、剥き出しになった岩肌を、ざらざらした風だけががらんどうに吹き抜けているといった風景が、本のページを繰るみたいに現われ、消えた。

私は、飽くこともなく、立ったり座ったりしながら、その水晶を出来るだけ多くの角度から覗き込もうとした。

父と母は、そんな私の頭をやさしく撫で、また今度にしようか、と次の街に誘った。

次の街は、さらに一つ表隣（隣というのは、空間をほんの少しめくる要領になっている）にあり、音速しか出ない父の古びた車では、少し難航するのだが、飴玉を一つ舐め終わった頃にはなんとか到着する。

次の街の売り物は、遊園地と動物園である。私は、決まって遊園地兼動物園の門を潜った。潜った、というのはとても適切な表現で、門とおぼしきゲートを抜けると体がすっと軽くなり、勢い込んで潜ろうものなら、いきなり天井に頭をぶつけかねないほど高く舞い上がってしまう。

父と母と私は、手をつないだまま、考えた方向に、考えた瞬間に移動している。ライオンの檻やキリンの柵、虹の中を巡って戻るジェットコースターへと、次々に移動して行く。とりわけ私はジェットコースターが好きで、父と母を残して、一人で乗り込む。音速の数倍というとてつもないスピードでジェットコースターは滑るのだが、ベルトの必要はない。ジェットコースターの重力に包まれてさえいれば、たとえ途中で立ち上がろうと、後向きであろうと、飛び出すことはない。

ジェットコースターは、空間のページをめくりながら進むので、わが家の傍をすり抜けたり、雪を頂いた峰々を見下ろしたり、流星群とすれ違ったりする。虹の色というのは、このみごとな配色を誰が決めたのかわからないが、近付くにしたがって、あたりのありとあらゆるものが自ら発

色しているのがそれとわかる。

赤い星々、赤い山々、赤い街。緑の星々、緑の川と、色が色を磨き、重なり合い、融合し合いながら次の色へとバトンをつないでいく。

父も母も敬虔なヒトである。

大意識への敬服と信頼は、形で表わせるほど簡単ではない。考えたり思ったりすることのそのものが、大意識の元へと直に伝わるのであるから、嘘のつきようがない。

といって、全てのものが大意識を敬服しているかというとそうではない。明らかに、大意識に敵意を抱いている種やヒト、大意識の考えとは異なった未来を築こうという超現実派など、数えればきりがない。父と母は、朝夕、北天の大意識に向かい、額ずき、祈ることを欠かさない。

祈ることに言葉などいらないのだが、父と母は、「初めの初めであられる方。全ての全てであられる方。あらゆるところに満ち満ちてあり、それでいて、いと気高きところにおられる方。愛そのものであり、かつ、どこまでも冷徹であられる方。あなたの御名が、永遠のものであることを知っています。あなたの御心が、必ず全ての全てにおいて行われることを知っています」という呪文を、いつのときも唱えるのである。

思春期にこそ、私は大意識の存在を否定し、父母をも意識的に遠ざけていたことがあったが、否定の思いを発する度に、体が反応する。攻撃の言葉を吐けば、その攻撃の言葉が自分の胸に刺さる。愚弄した態度に出れば、私自身が他からあしざまに扱われる。しまいには、私の心と体を、私自身ががんじがらめに縛り付けてしまうのであった。

空の街での日々は、何に例えたらいいだろう。

大意識への思いを外さなければ、どんなことでもかなえられる世界、と言えば半分は当たるだろうか。

言葉や文字ではとても表現出来ないのであるが、α波の中を漂い流れている、と言うのも一つの例えである。

私とリンダとの愛は、恋人同士というより、「私―彼女、彼女―私」とでも言うべきだろうか。私が願うときには彼女もそれを願い、彼女が願うときには私もそう願った。

私が大意識への思いを忘れかけていると、リンダが私の思いの至らないところを支えてくれる。リンダが感情を高ぶらせていると、さりげない私の言葉が彼女をなだめるという具合だった。

光のシャワー。花々の香気。空を形容する言葉は、数限りなくある。思いはただちに実現し、幾重にも、幾層にも、異なった世界が姿を見せる。空での日々では、見たいと思ったことで見られないものはなく、訪れたいと思ったことで訪れられないところはなかった。

だから、焼けただれた廃墟の街を思えば、あたりはただちに廃墟の街と化し、怒りを発すれば、あたりはただちに猛獣の徘徊する草原と化した。老いるということもなかった。もちろん、老いたいと思えば、たちどころに二つに折れ曲がった肢体になってしまうのであるが。

陽は正確に朝露を払って上り、夜は静かな眠りのためにあった。陽の暖かさは快適であり、夜ははるか遠くから近付き、同時にかなたで潮の生まれ変わる音が、リズミカルに聞こえた。

「顔色がよくないな」

気が付くと、上の私が見上げている。

「そろそろか」

上の私は、少しずつ私に加重がかけられ始めたのではないかと、案じている。

私自身、どこか私ではない自分を感じ始めている。

「焼け付くみたいだ」

産毛によく似た短い草をサンダルが踏む度に、乾いた砂煙がパッと舞い立つ。陽は中天にあり、私たちの影はパナマ帽の丸さと、丸さの中からひょいと突き出される杖と、手と足が描く細い髭状のものの形で、砂原を二つの海月(くらげ)が揺らめき漂う図さながらといったところである。

「目が回るよ」

実際、パナマ帽を抜けてくる陽射しの激しさといったらない。四十度、いや、五十度近くはある。その証拠に薄いサンダルの底は焦げ付き、流れ落ちる首筋の汗もたちどころに霧散してしまうのか、肌はひからびきっている。

上の私の顔といったらない。あまりの暑さに何度も涙を流した跡だろう、目の縁に砂の隈が乾いて貼り付いていて、それが顔をゆがめると、どこかユーモラスな動物の顔そっくりになる。

今何日目だ、と私はわかりきっていることを聞く。

「六日目だ。あと四日は辛抱せねば」

「今度の行程は、特にこたえるのと違うか」

「かもしれない。場合が場合だし」

「こんな大事な局面に、どういうわけで選ばれたんだ」

「一応、地上へのエネルギーを溜め過ぎている者を優先する、ということらしい。だけど、実のところは誰にもわかりっこない」

「今回の計画では、一挙にヒトの十人に一人が地上に下ろされるという。それも、かつての売国奴、殺人鬼、盗賊、暴力常習者、狂人、詐欺師、卑劣漢、偽善者、権力主義者、現実主義者、拝金主義者、逃亡者などなど」

これを聞いただけで、来たるべき地上の様が、おおかたわかろうというものだ。恐らく、権謀術数渦巻く混乱の中で、欲と我執と栄達を巡っての、すさまじい抗争が繰り広

げられるに違いない。

「他国を根絶やしにしようとする一方、核シェルター開発に、国家予算の全てをつぎ込もうとする強国がある」

「国家的企業の破産。街にあふれる失業者の群れ。打ち壊し。暴動と弾圧と虐殺」

「学歴万能主義が崩れ、権力を得た一握りのボスが、美名のもとに民を食い千切る。謀略や賄賂や詐欺の横行」

「金銀でピラミッドを築こうとする王もある」

「天に届くほどのタワーをこしらえたり」

「不老不死の薬剤完成に、王手をかける科学者もいる」

「焼かれようと、穿たれようと、どんなウィルスにだって負けない鋼鉄人間に変貌させてしまうという、人類悲願の秘薬だ」

「風俗は乱れる。十二、三歳の売笑婦は路地に溢れ、男娼も市民権を得て、連日マスコミに登場する」

「得体の知れない犯罪の多発。金まみれのカルト。モラルの低下。未成年者たちの、止まるところを知らない暴走」

「ヒトとヒトの争いならば、まだ説明できる。問題は、屍を累々と横たえる鳥やシマウマやアザラシたち。彼らにとって、地上は灼熱の竈なのだ」

「万物の霊長、が聞いてあきれるな。ヒトは、これほどまでに堕ちることが出来るのか」

「それなのに、己れの足元が根こそぎ引き抜かれるということに、寸前まで誰一人気付かない」

「オリエンテーションのとおりだとな」

「阿鼻叫喚の図そのものだよ、全く」

「そのなかの一人として選ばれた。しかし、俺はまだいいとして、リンダはどうしてだ」

私は、リンダがどうして今度のリストに上がったのか合点がいかない。リンダは大意識の傍近くにあり、周囲の信望の厚さでは恐らくトップクラスだ。もっとも、大意識の構想に誤りのあろう筈もないので、リンダ自身何の懸念もなく、私より少し遅れて地上に下り立つことになっている。

「それにしても、顔色がひどく悪いな」

上の私が、顎髭がくっ付かんばかりに顔を寄せてきた。気のせいか、上の私の顔面が歪んで見える。両目の間が妙に離れ、顎髭が斜め横に伸びている。

「お前の顔こそ、どうした。まるで、ひしゃげちまったようだ」

「それはないぜ。やっぱり、そろそろ始まりかけたんじゃねえか」

上の私のしゃべる声が、どこかドラム缶を打つみたいに耳元で鳴る。と、砂原に立てた南天の杖が、突然青大将に姿を変え、のたくり始めた。

これ以上進むことに耐えられなくなった。
先に発とうとする上の私に、何度、もうやめてくれと叫んだことか。叫ぶばかりでなく、砂原に俯せになり、力の限り大地にしがみつこうとした。
しかし、大地の砂は、私が爪を立て、もがけばもがくほど、指の間から軽々と逃げて行く。掬っても、砂はするりと指先をすべり、元の位置に戻ってしまう。
掬っても駄目だとわかった私は、砂原を叩いた。叩き付け、あらんかぎりの声で父の名を、母の名を呼んだ。救けてくれ、殺される、誰か来てくれ。喉が張り裂けるほど、叫んだ。
「もう、行かねば」
上の私が、砂原に張り付いている私の腕を取った。むごい仕打ちだと恨んでくれるなと呟きながら、もう一方の腕も取った。
「嫌だと言ったら嫌だ」
私がそう叫んで上の私の手をふりほどこうとしたとき、いきなり、稲光りが袈裟がけに私たちを裂いた。そして、間髪をいれず雷鳴が轟く。
私たちは、叩き付けられた蛙みたいに砂原に転がり、いや、へばりつき、雷鳴が止んでも、しばらくの間起き上がることが出来なかった。すくめた首を最初に伸ばしたのは上の私だった。私は、殆ど気を失いかけていたが、恐る恐る目を開いてみると、稲光りが走り、雷鳴が轟いたのだったろうあたりには、まるで何ごともなかったというふうに、六日目の陽が容赦のない光を降らせていた。
八日目の陽が沈みかけた。
私たちの影が、背後に細く長く伸びる。
私の体調は最悪で、頭骨の中では、錐や手鉤みたいな鋭いものが、めくらめっぽうに脳髄を突いて来る。ビシッと手鉤が打ち込まれたと思うと、刃先十センチもあろうかと思われる錐が、所かまわず穴を広げる。腹部には、パワーショベルみたいな機械が入り、刃物で切り刻んだ臓器の山を、無造作に崖の底に放り投げる。
私は、声もたてない。砂原の上に、今自分が何故にいるのか。何をしているのか。そんなことは、いい。考えたくもない。とにかく、てんでおかしい、自分自身が。
本当は、おかしいのだという思いさえ抜け落ちているらしいのだが、私によく似た、左手人差し指の捩れた一人の男が、これでもかと耳元で囁いてくる。
「やけを起こすなよ」
「困ったときは、俺がいるってことを忘れるな」
「二十年、たったの二十年の辛抱だ。お前の最愛のリンダも一緒だ。何とかなるよ。きっと頑張れるよ」
「いいか、オリエンテーションで学んだことの一つに、全

ては思いの反映だってのがあったろう。山を思えば山に上り、川を思えば川となって流れる。増長した思いでいれば、増上慢の男になる」
「高所からヒトを見下ろしてばかりいると、地上にさらに強いエネルギーの場をこしらえてしまうことになるぞ」
「ヒトが死ぬ。虫けらみたいに、誰も彼も息絶える。未曾有の天変地異だ。山がうねり、海が吠える。しかし、そんなとき、よく見るのだ。思い出すのだ。こいつは、あのオリエンテーションの、リハーサルの、そのとおりじゃないかと」
「それでいいのだ。理不尽でいいのだ。元々、ありとあらゆること全てが理不尽なのだ。だから、ただただ流れに身をまかせるのだ。それだけだ」
男の声が、私の脳髄を次々に激しく揺すり、穿ち、通り過ぎる。私には、男の言うことの意味など何一つわからないし、ただもうやめてくれ、と叫ぶばかりだ。

二

これから先は、私自身の表現では、あまりにも事実と異なり過ぎることになるので、主として上の私の言葉での表現となる。ちなみに、私（下の私）は、一人では立つのもかなわず、十年にわたって受けたオリエンテーションの内容も、リハーサルのことも、街の佇まいのことも、父や母のことも、使い慣れた言葉も、全てを失い、微かに呼吸をしているだけの〈もの〉に過ぎない、と言えば当たらずとも遠くはないだろう。
よって、以下は、上の私のことを〈私〉と呼び、私のことを〈下の私〉と呼ぶことになる。この呼称の転換は、本来の私自身が、掟により、私自身を失う過程を必ず経るのであるから、そのように転換することが必要であるし、そうすべきであるということになっている。
九日目の夜は、いつもと変わらず訪れた。
陽が沈んでかなりの時間が経つと　砂原には、昼の暑さが嘘みたいに、骨身にまで通る寒さがやって来る。
火を焚こうにも、木切れ一つ見当らないし、火の元もない。ただ、絹の衣を肌にひき伸ばせるだけ伸ばし、気持ばかりの防寒を試みる。であるから、眠ることはおろか、考えることもままならない。
そんな私の唯一の支えは、これから地上に下りることになる下の私の存在である。下の私は、掟にあるとおり、三日ほど前から徐々に加重を受け始め、今では殆ど泥人形と化してしまった。私がオリエンテーションを受けていなければ、この変化には、到底耐えられるものではない。いや、この変化ばかりでなく、苛酷を極める筈の地上でのことを思うと、溢れてくるものを止めることは出来ない。

なぜ、今回は私なのか。いやいや、選ばれたのはなぜ下の私なのか。

このことをいくら問うても虚しい。が、なおこの場に立つに及んで、大意識になぜ私なのですか、と問い正したい。

もちろん私たちは、大意識の命ずるままにいなければならないことは承知しているのだが、今回だけは、出来れば見逃してほしかった。例え、次回以降、たて続けに十回の指名を受けようとも、である。

今、下の私は、目を宙に見開いたまま砂原に仰向けにひっくり返っている。口も開いたままであるが、その口から出て来るのは、獣の唸りに似た低い音ばかりだ。それでも、突然、うれしいよ、とか、ありがとう、という類いの声になるのは、まだ完全に眠っていない記憶の一部が、空の街での父母との生活などを、微かに思い起こし、ゆっくりと反芻させているせいであるのかもしれない。

雲一つない深い空であるため、雪一片落ちて来ることはない。そんな中、気温にしてどのくらいまで下がるのか。

吐く息がたちどころに凍るのをみれば、零下数度か。砂原の砂が踏めばぎしぎし鳴るのは、何の故か。

身にまとうものは薄い衣一枚であるから、繊維の隙間を通し、冷気は容赦なく肌を刺す。我慢の限界を越えそうになると、互いの体を寄せ合い、あるいはさすり合うことで、かろうじてしのぐ。

下の私の体は、自律神経まで侵されてしまうので、体温の維持もうまくいかないし、鼓動だって、ちょっと気を許した隙に止まってしまうのではないかというか細さを感じる。事実、突然、荒い呼吸になったと思った後、ふっとそれの止むときがある。

そうなると私は、下の私の名を呼び、頬を力いっぱいに叩き、唇から息を吹き込み、必死で腕の脈をとる。

やっと下の私が息を吹き返した後、やれやれと吐息をつきながら、どうしてあの息を止めたままの状態にしておいてやらなかったのだろうか、と深い悔いに苛まれる。下の私は砂原に仰向けのままの泥人形然となった今、本当に何も感じずにいるのだろうかと、考えずにはいられない。

つい前回にもヒトとして生まれ、行きがかり上、百度生まれ変わろうとも、との恨みを抱いて戻って来たとはいえ、あれは地上での仮の姿に過ぎないではないか。このようにして、大意識の掟により、全ての記憶を抜かれた上で地上に下ろされた結果の、ちょっとした勇み足に過ぎないのではないか。

それほど難儀なのだ。

例え、オリエンテーションやリハーサルで心と体の髄にまで叩き込まれたことであれ、ヒトとして生まれ落ちた途端、肝心の髄そのものが抜かれてしまう。もぬけの殻となって、人間の海を泳いで行くことになる。

なんてことだ、とつぶやく。何の理由あって、死ぬほどの目（実際私に言わせれば、ヒトとして生まれるということは、死ぬという以外に言葉を継ぐことができないほど過酷なことなのである）に遭いながら地上に下りるのだ、と大意識に向かい叫びたくなる。

下の私が生まれようとする地上は、今、束の間の平穏の中にある。肉食獣の歴史も、ヒトの歴史も、もともと弱肉強食というロジックでストーリーが展開されることになっており、今の地上もロジックのとおり、ほんの最近まで、全世界を巻き込んだ戦争が二度勃発し、全人口の十分の一が死滅した。ここ数十年は大戦争の反動もあってか、あやうい均衡の中で、第三の世界戦争はなんとか免れているが、局地的には民族間、部族間の戦闘が間断なく続き、ヒトのヒトたる面目を保っている。

下の私の地上での父と母は、五百年の昔、領地を奪ったあの盗賊まがいの一族の頭目で、ここに、巧妙な抗争の種がぬかりなく播かれている。しかし、今回の下の私の役割は、父と母に溺愛される筋書きとなっており、リンダとの恋に落ちる下の私を、父母は幾度も幾度も体を張って止めようとする。最高学府の中でも極め付けのエリートとして学ぶ下の私と、売笑婦であるリンダ。父と母は、二人が釣り合わない関係だと口を揃える。

裁判官である父。評論家として名高い母。二人の寵愛を一身に受けた下の私は、何不自由なく育ち、持ち前の才能を存分に発揮して余すところがない。

たまたま出会ったリンダ。リンダは、民族間の抗争を逃れ、身をひさぎながら日を暮らしている女だった。

ところが、民主派の論客で名高い父も母も、二人の関係には頑として首を縦に振らない。と、こんなふうに話は進んで行くとのリハーサルを繰り返してきた。

裁判官と評論家という父と母。二人には、かつての、あの盗賊まがいの一族の面影は殆ど見られないのだが、下の私とリンダとの間に立ちふさがるときの表情は、肉親の情を懸命にまぶしているとはいえ、自分の道理のためには、どんな障害も叩き潰してやまないという、持ち前の闘争本能が見え隠れしている。

背景には、二つの大戦後、ほぼ完全に汚点を払拭したかに見える社会と、その高度成長と、みるみる存在感を増してきた科学の論理によって、あらゆるものが説き証されつつあるという、もう一つのロジックがストーリーを貫いている。

二つの大戦での、人類の十分の一もの犠牲の上に立ち、しかも、そのことの禊ぎはなされたとする風潮。高度成長の華やかなスポットライトの中で、小さな作り舞台の周辺

だけが自らの世界だと決めつける風潮。たかだか数百年来のデータの寄せ集めに過ぎないものを科学と名付け、あたかも人類最高の叡知であるかのごとくに主張し、目に見え、耳に聞こえるものだけにしか真実は存在しないと嘯く風潮。そして、その蛇に似た低く限られた視点でしかものを見ることのできない者を、司祭のごとくにあがめたてることの風潮。こんなことは、言うまでもないが、空の街で暮らしてきた私たちの目にはなんとも悲しく、あさましく、どうにもやり切れない思いでしか接することのできない事柄であるのだが。

そんな中に、下の私は下りて行く。

十日目の陽が上り始めた。やれやれだと思う。

リハーサルのとおりで行けば、陽が中天に上りきる直前に、大意識からの指示が届く。

〈行くがよい〉という、砂原いっぱいに響きわたる大音声の指示が。

その指示を受けると、間もなく、終点のクレバスが不気味な口を開いている地点に導かれる。いよいよ私たちは、最後の仕事にかかることになる。しかし、私たちに許される時間は限られており、ここは十年の間に、何百回と繰り返したリハーサルどおり、寸分の手違いも許されない。

まさに陽が中天にかかろうとするちょうどそのとき、大意識からの一滴の雫とともに放たれる赤いカプセルと、大音響の指示を受け、下の私は、赤いカプセルに包まれ、直立したクレバスの中を血飛沫をあげて落下する。

私は、砂原に横たわっている下の私を見た。

下の私は、昨夜来の冷えのせいもあるのか、既に虫の息である。手や足は湾曲して縮まり、顔の血の気はすっかり失せている。脇の下に手を当てれば、間遠くなった鼓動が微かに脈を刻んでいる。

私は、白く凍った息を吐きながら、下の私のねじ曲がった手をとり、指の一本一本を胸の前で組んだ。

そして、一人ごちる。

「とうとう、お別れだな」

「あっけないもんだ」

後は、大意識の指示とともに現われる赤いカプセルを待つことになる。それまで、半日足らずの間を強烈な陽の元、掟に定められた呪文を唱えながら待たねばならない。

「今日の陽はやけに赤いな」

遠く越えてきた街の方角から、ぬるりと、血の色をした陽が躍り出た。

「街のみんなは、変わりないだろうか」

「父と母は、毎朝額ずき、大意識への祈りを必死に唱えているのだろうか」

私は、大意識に向かい祈る父と母の、いつにも増して真

剣な眼差しを思った。その父と母は、白いカプセルに乗せられた私たちが、街のはずれの斎場から滝壺に落下する瞬間には、肩を抱き合って泣き崩れた。

下の私が地上での任務を終え戻ってくるまでの間、私は街からは隔絶された〈中空〉に住まい、漂いながら、ひたすら下の私の観察に努めることになる。これも、掟の末尾に記されている。中空の私は、地上の吹きすさぶ嵐に直接巻き込まれることはないが、地上とは表裏の位置になっているところにあって、同じ体験をしながら下の私にかかわって行く。

つまり、私には、空の街でのオリエンテーションの内容や、大意識の意図に通じる路は閉ざされていないのであるから、これらの過程や終結の様を鮮やか過ぎるほどに見ることが出来るのに対し、下の私の前には、ただどこまでも深い闇しかない。下の私の行く末を思うと、暗澹とした気分に陥るばかりで、言葉もないのであるが、残された私は、掟に定められたとおり、任務を全うするより外ない。

「初めの初めであられる方。全ての全てであられる方。あらゆるところに満ち満ちてあり、それでいて、いと気高きところにおられる方。愛そのものであり、かつ、どこまでも冷徹であられる方。あなたの御名が、永遠のものであることを知っています。あなたの御心が、必ず全ての全てにおいて行われることを知っています」

私は北天の大意識に向かい、砂原に額ずき、掟に定められているとおりの呪文を唱え始めた。

陽が中天に上り詰めようとしている。

幾度呪文を唱えたことだろう。

砂原に額ずいた目には、止めようもなく涙が溢れ、流れ落ちる。いったい、これほどの酷い掟があってよいものかと、いまさらのごとくに歯噛みをする思いである。

傍らの下の私は、土気色の顔で、もはや鼻孔に通うものもないと見える。こうやって、殆ど屍と化した下の私に、やがて指示が下る。

〈行くがよい〉と。

その大意識からの指示を待っている。

束の間の平穏の内にある地上。しかも、下の私がもの心つく頃には、蛇の目ほどしかものの見えない者たちが、地上の大半を我がもの顔に牛耳るのだ。ヒトをヒトとも思わない風潮。いや、動物や植物たち他の種を、同じ故郷をもつ仲間だなどということを、考えることも知ることもない、ヒトという名の〈万物の霊長〉たち。

しかも今回、かつての売国奴、殺人鬼、盗賊、暴力常習者、狂人、詐欺師、卑劣漢、偽善者、権力主義者、現実主義者、拝金主義者、逃亡者などを選りすぐって地上に下ろすのだという。何故の掟なのか。何故に私なのか。いやい

や、下の私なのか。そう考えながら呪文を唱えていると、あの雷鳴が再び轟く気配に、あわてて首をすくめ、砂原にめり込むほどに額をこすり付けた。

「初めの初めであられる方。全ての全てであられる方。あらゆるところに満ち満ちてあり、それでいて、いと気高きところにおられる方。愛そのものであり、かつ、どこまでも冷徹であられる方。あなたの御名が、永遠の」

三

最近、大きな地震が頻発している。震度四や五などといった揺れが、国内のいたるところで起きる。それも、間が短い。テレビの地震速報がその度にテロップを流すのであるが、もはや見慣れた光景になり、人々はただチラリと画面に目をやるだけだ。政府の防災関係委員会も、はじめは賑々しく開催され対策を協議していたが、今では全くテレビニュースに取り上げられることもなく、新聞の片隅に五行程度で報じられるに過ぎない。

世界に目を向けると、竜巻、ハリケーン、地震、火山の噴火、干魃、洪水、放射能洩れ、磁気異常、頻繁に現れるオーロラなどのニュースが毎日のごとくに報じられ、週刊誌などは「世紀末来たる」と毎号が予言書まがいの内容を呈している。勿論、映画界でも、「〇〇の終末大予言」などといったホラーサスペンスものが話題を集めており、日常では、各戸にチラシを持った特定の宗教団体からの訪問が続けられている。

同時に、情報手段の急速な発達もあり、これまで大国の抑圧の元にあった国や、専制者に牛耳られてきた国の民衆が反攻の旗を掲げ、専制者の首を刎ね、その秘蔵の財宝を暴き、首都を焼き討ちにし、その動きが国を超え、野火を思わせる広がりを見せている。もっとも、専制者側も手を拱いているわけではなく、弾圧は過酷を極め、そこに大国が割り込んで、見境のない空爆やミサイル攻撃を行い、細菌兵器を用いることも珍しいことではなくなった。

富めるＩＴ企業のオーナーや石油財閥などは、金の力にあかせ、取り残された未開発国や、これまで歴史を先導してきた先進国の内懐にまで食い込み、一国もろとも買い上げてしまうという勢いである。一方、内乱で焼け野原と化した国では、累々と横たわった人間や動物の屍にハゲタカや鴉などが群がり、あっという間もなく、骨格もわからぬほどに食い散らしてしまうという有様である。

なんとか逃げ込んだ倉庫や洞穴の奥では、細菌兵器によるとみられる熱や痙攣や下痢を伴う感染症が蔓延し、医薬品などが届く間もなく、死体の山が築かれていく。

アジアの一角から立ち、類を見ないほどの謀略と奇策を画策、駆使し、これらをことごとく成功させ、熾烈な戦闘に打ち勝ち、今や世界を睥睨するほどに力をつけたＹ国

は、核と金の力を傘に、他国全てを膝下に組み敷こうとし、国連を解体してしまうという挙に出た。

その快進撃を現実のものとした若い大統領は、自らの名を刻んだ世界屈指の高さと華麗さを誇るタワーを大統領府の傍に設け、屈服せしめた各国首脳をタワーを見上げる迎賓館に招き、恭順の意を表すべき書状にサインを求め、血判を押させた。

この国では、国境には強固な鋼鉄の城壁を幾重にも巡らせ、首都近郊には、地球外惑星の衝突などといった万一の場合の衝撃にも耐え得るという、数百万人を収容することの出来る地下都市を設け、それを核シェルターで覆った。地下都市の数か所の研究施設には、世界の頭脳を集め、不老不死に至る薬品の開発を進めさせ、核や細菌兵器の攻撃にも備えた身体改造計画を、急ピッチで進めていた。

このＹ国に近い国境のあたりには、世界中から流れ込んだ売笑婦や男娼たちがあふれ、麻薬に手を染めた連中が昼となく夜となく、往来にも場末にも転がっているのだった。往来にはいつも雑多な国の言葉があふれ、喧嘩に湧き返り、故知らない無差別殺戮が突然始まったりした。

教会や祈祷所は、難民たちの避難所と化し、一切れのパンと一椀のスープを求めて、着の身着のままで朝昼晩を問わず人が並んだ。

いたるところに、霊能者と称する人物が現れた。彼らは決まって、「この世の終わりは近い。終末には、個々の生き様の全てが裁かれる。今からでも遅くない。私を信じ、帰依せよ。私は神の御使いである。私の聖なる言葉を信じよ」と迫った。

週刊誌の「世紀末特集」には、十有数名にのぼる著名な予言者の説を並べ、それらの違いについて事細かに報じている。人々は、予言が幾通りもあり過ぎ、しかも一つ一つが自らの内容を誇示しようと、他と異なっている点を強調するものだから、「結局、予言は予言に過ぎないだろうさ」という具合にファッション化してしまい、大多数の国民は、ゲームの優劣を競うといった感覚で楽しんできた。

街の路地裏には、「除霊」、「強運」、「目覚めの館」、「〇〇教」、「△△神」などという看板が立ち並び、中には一切の光や磁場を遮断して行うという「降霊会」などに、長蛇の列が出来ていた。

Ｙ国の若き大統領は、お抱えの国教の法王の勧めをもとに、占星術師や大統領府の軍師の意見の総意を得て、これまでプロパガンダとして用いてきた「世の終末近し」の風聞をより強く流すことを決した。同時に民族自立の決起を煽り、この時のうねりとパワーを利して、Ｙ国を盟主とする揺るぎのない世界王国を形成し、自らを覇王とならしめるべく作戦を着々と実行しつつあった。

まず、世界の疲弊した国々、特に半世紀にわたりＹ国に敵対してきたＷ国の息の根を止めるため、謀略をもって第三次世界大戦を起こし、核ミサイルと地震兵器と細菌兵器の容赦ない行使により、幾多の島々や大陸の一部を海中に沈め、Ｗ国を完膚ないまでに瓦解させ、数千万人の死者と行方不明者を数えるという凱歌をあげた。

一方で、Ｙ国への補給緩衝地帯として、これまでに恭順の意を表して来た同盟国には手厚い保護を加え、Ｗ国との交戦の巻き添えとなり疲弊した国々に援助のための武器を提供し、医療、物資等の細やかな支援の手を差し伸べ、盟主としてのしたたかさと抜かりのなさを見せ付けた。

かつての敵対国Ｗ国なき後には、Ｗ国の同盟国であったＣ国、Ｅ国などの小国が残るだけの様相を呈していたが、批判勢力の根絶にまでは及ばないという、これもＹ国流の計算し尽くされたテーゼのもと、「みだりに干渉はしない」という姿勢を世界に示していた。

人類の積年の夢である不老不死に至る薬品は、今は試用段階にまで達し、併せて身体改造計画も着実な成果を見せつつあった。身体を改造し、不老不死の薬品を服用すれば、三十歳程度の年齢を保ったまま、八百年は生き続けることが出来るであろうというのが、ＤＮＡを読み解く中から最新技術が導き出した解答だった。

大統領は、やがて大統領という名を捨て、神の列に座する算段だった。今や神の住む唯一の国であるＹ国は、地球の王として君臨し、地球外からの邪悪な生命や天体による破壊工作にも、十二分に対応出来るというのが、大統領が描く現実のシナリオだった。

十年前から、Ｙ国の最大のパワースポットともいうべき首都郊外の北の山頂に、雲を貫くタワーの建築が行われており、大統領の名が刻まれ、金箔を施されたタワーの存在は周回する人工衛星からもくっきりと姿をとらえることが出来、タワー全体が天体の動きや磁気や大気の変化を観測するためのアンテナでもあった。第一のタワーの完成は間近であり、もう一つのパワースポットである南郊外の山頂にも、万が一、第一のタワーが妨害されたときのためにと、第二のタワーの基礎作りが早くも進められていた。

「万全だな」

大統領はほくそ笑んだ。世界中を見渡しても、今や自らの存在を脅かすものはなく、これまで長年にわたりＷ国制圧のために共に戦ってきた、国民からの人望も厚く尤も手強い存在であるＹ国の先代大統領の息子二人も、クーデターの企てありとして秘密警察を差し向け、秘密牢に軟禁し、大統領自らの手により闇に葬ってしまった。

これらは、ほんのこの三年の間の出来事だ。三年半前には、国内のテロに、首都の一部を爆破され、数万人の国民の死とともに、自らも大火傷を負わされる羽目になった。

巻き返しに出たのは、いうまでもない。策を弄し第三次世界大戦に持ち込み、激しい鍔迫り合いの後、数秒か数センチ単位の際どい勝負に競り勝ち、その勢いのままに攻め付け、圧倒したのだった。

大統領は、赤茶けたケロイドの跡の残る左頬を指先でこすり上げ、にんまり笑った。身体改造計画が成れば、このケロイドなど跡形もなく消してしまうことが出来る。

妻のナターシャが入って来た。妻といっても、八人目の妻であり、同盟国の内でも最も厚い友好の度を示しているＡ国の元華族の出であり、若い。この北の山頂を正面に見る執務室の内のいくつかが、大統領の執務の一つである妻との濃密な時間を過ごすための部屋となっていた。

ナターシャの腹には、既に五か月の生命が宿っている。そのナターシャは体型も全く変わらず、肌は抜けるほどに白く、大統領を喜ばせるための十分な魅力を備えていた。

「御機嫌ですこと」

「ああ、ちょうど君のことを考えていたところだ」

「まあ、相変わらずお上手なこと」

「ナターシャは、僕の生命そのものじゃないか」

「嬉しいわ」

「今日はとびきりのプレゼントがある」

「何でしょう」

「きっと気に入ってくれる筈だ」

大統領は影武者の中の一人を呼び、留守居を命ずると、ナターシャの肩を抱いて奥の部屋に消えた。

科学者団から、小惑星が地球に接近しているという報が大統領に報告されたのは、半年前になる。緊急に、閣僚や軍や科学者団のトップによるシークレット会議が持たれ、場は緊迫した雰囲気に包まれた。

「大型のロケットに核爆弾を乗せ、惑星に命中させるという手があります。かつて、小惑星の幾つかを破壊してきました」

「今度の惑星は」

「規模はこれまでの数十倍とみていただきたいのです」

「破壊出来るか」

「うまくいけば、破壊出来ましょう。破壊出来なくとも、軌道はずらせます」

「必ず、成功させるんだ」

会議はそれだけで終了した。大統領が退席した後、軍関係者や科学者たちは分析結果を細かに検討し、防災棟の電子計算機やレーダーを駆使して、作戦を秘密裏に検討する。このような情報は、国内はもとより世界には全く知らせることをしない。実行するときも、大統領には事前の説明を簡略に行い、特殊任務を帯びた大統領府の精鋭軍により、百パーセントの確率で成功させ、報告した。

世界で頻繁に発生する地震や津波や竜巻などは、あらかじめ周到に練った計画により、この精鋭軍が宇宙圏に設けている基地に備えた地震兵器等を用いて招いているものだった。プロパガンダにより、世界中に流布した終末思想に信憑性を与えるために、必要欠くべからざる作戦の遂行の成果なのであった。

全てが秘密裏に、計画どおりに行われ、その被害地救援に当たる軍隊や、防災担当のあらゆる機関にさえ、その真実を伝えないという徹底がなされた。

大統領の神格化計画の方も、この大統領府精鋭軍が一手に引き受けていた。霊能者、学者、国教神父らが綿密に吟味し、計画した教典の作成整備にも拍車がかかっていた。神は、この荒廃した地上を救うべく、Y国の山中に貧しい青年として降臨する手筈になっており、青年のDNAには、大統領のものがコピーされ、既に青年は大統領府の別室に寝起きしていた。

Y国の首都K市には、軍事、経済、流通、教育、文化、芸術等の全てが機能的に配置され、その発展は「世界の全てがK市から出で、K市に戻る」と例えられるほどだった。

Y国内では、多くの犯罪者が国境近くの拘置所に留置されていた。政治犯と言えば、つい数日前まで国の要職にいた人物や、政権闘争に敗れた者、反体制派、反体制知識人、反体制作家、テロリストたちといった大物が収監されていた。凶悪犯と言えば、無差別殺人犯、狂信的なカルト宗教の主宰者、銃刀の無許可所持者、レイプ常習者、親殺し、子殺し、自爆テロ未遂者、売国奴、逃亡未遂者などで、檻の中から絶えず奇矯な唸りを上げていた。

とうに百万人を越えたと目される収監者たちは、留置所からほど近い実験所に移され、新薬品の投与実験、新たな細菌兵器の試用実験、宇宙磁力に曝すことでの対応実験等、恰好のモルモットとして使われ、終われば銃殺されたり、血の一滴が流れ落ちるまで放置されたりし、最後の最後には、人間であった痕跡をどこにも留めることなく抹消することの出来る機器の前に並べられ、煙さえ出さずに消されるのだった。

Y国のエリートである上流階級に属する人々の生活は、快適そのものだった。

食物は何でも自由に手に入り、一日の三分の一の時間を働けば、十分過ぎる報酬を得ることが出来た。高層マンションは全てが耐震構造にあつらえられ、考えられ得る限りの強い震度にも動ずることなく、日常生活を楽しむことが出来た。勿論、納税額も多く、勤務部署の上司等には少なからぬ賄賂を送ってさえ、生活には十分ゆとりがあった。

国の政策の最も重要なものとして、夫婦には三人以上の

子供を持つことが義務付けられ、さらに、同盟国の戦争孤児などを二人程度ずつ預かることが課せられた。これは、エンジェルプランと呼ばれ、Y国が歴史に誇ることが出来る政策だと豪語するものであった。

週刊誌等は、盛んに「世界終末」を煽り立てていたが、その終末のカタストロフィの中にあっても、神に選ばれたY国民の主たる者は必ず方舟に乗れるのだとされていた。そして、さらなるい高い次元の世界がそこまでやって来ているということの方に、国民の多くの関心が向けられ、生活を明るく前向きにしていた。

富の配分も、政治体制も、安全政策も、科学も、医療も、教育も、文化も、芸術も、人口構成も、全てが若き大統領の下に改められ、Y国にはかつてない祝賀ムードが漂い始めていた。

しかし、Y国の首都であっても、メインストリートからいくらか外れた街の下流階級の大多数の国民は、粗悪で老朽したままの建物に住み、エリートたちの足元にも遠く及ばない日々の報酬を得、かろうじて食いつないでいた。何と言っても、第三次世界大戦と呼ばれるW国との戦いでは、古い街並みの大方は焼かれたままであり、不発弾が転がっており、放射能汚染地域を避けるため、狭いエリアにひしめき合って生活をするという有様だった。

下級民の中では、自分たちは果たして方舟に乗れるのかどうかに不安を抱き、カタストロフィの到来により宇宙の藻屑と消え去るのだ、との憶測も大勢を占めていた。そうなれば、もはや方舟の乗組員の規範となるという人格の陶冶や醸成や悔い改めや気付きにも意を示さず、詐欺師はその腕をより磨き、強盗団は金や宝石の在処を白昼堂々と破り、路上から何者かに連れ去られた少女は陵辱され、三日後には腹を割かれ、切り刻まれて発見されたりした。

テレビやラジオのニュースでは、世界のいたるところで大地震が発生し、あるいは竜巻や、大型ハリケーンや、洪水や、大干魃が発生しているとの情報が流れない日はなかった。しかし、対応は、これまでの化石燃料の使用による二酸化炭素の排出を規制すべきだとの問題に帰結するばかりで、論評もそれ以上は進まなかった。

大統領府では、これらの異変のほぼ全ては、自らの兵器を駆使してのものだと知っており、それは科学者団や軍幹部の最大の任務であったし、殆どの異変の因果関係を正確に捉えていた。

四

生暖かい風が、吹き抜けて行く。

この一週間、真冬にしては珍しい陽気が続く。いつもの年だと、数センチの雪が積もり、凍りついた道路では何台もの車がクラッシュし、リタイアするのだが、今は順調に

流れている。首都圏から西の都市に至る高速道路は、ひっきりなしに車の列が過ぎる。

リンダは、左頬に大きな痣を作っている。三日前、夜陰にまぎれ店を抜け出て来るとき、非常階段の手摺りに、したたかに打ち付けたのだという。パスポートのないリンダが店で働くには、極めてまずい展開となった。おまけに、未成年である。私服警官が店に踏み込んだとき、リンダはカウンターの中で水割りをこしらえていた。

ロックの強烈なリズムがパタリと止んだかと思うと、数人の踊り子が部屋の隅に追い込まれて行った。リンダは電気の消された店内で、どうカウンターを抜け、どう非常階段に出たのか覚えていない。ここで検挙されれば、これっきり私に会えなくなる、と咄嗟に考えたのだった。

アパートのドアを打ち鳴らす音に、私は目を覚ました。ドアを開けると、リンダが裸足のまま転がり込んで来た。時計を見ると明け方近かった。

「殺される」

リンダは、震え声で言った。

「間違いなく殺される。銃殺刑だわ。逃げても逃げても、追っ手を差し向けてくる」

リンダは北の海岸に打ち上げられた漁船から、都会の雑踏の中に逃げ込んで、二年近く経つ。そのわずか二年の間に、仕事を七つ替わっている。

「ごめんなさい。あなたに迷惑をかける。ここにいてはいけない。でも、一目会いたかった。そうすれば、もうどうなっても構わない」

リンダは、流暢なY国語で話す。顔立ちもY国人とそっくりだから、外見では、彼女がY国に逃げ込んでいる外国人だとは誰も気付かない。私は、大学の定期試験を間近に控え、徹夜の勉強を始めたところだった。

リンダと顔を会わせたのは、秋の学園祭のテント企画で、餃子の店を始めたことがきっかけだった。メンバーの一人が、行き付けの餃子屋で働いているリンダを助っ人に連れて来たのである。そのリンダを一目見たとき、私の心に稲妻となって走り来るものがあった。どこかで、会ったことがある、というほのかな温かい気持だった。

リンダは実に手際がよかった。みんなが餃子の具を一つ詰めるとき、五個は詰めた。勿論、焼き加減など手慣れたもので、味も抜群であるから、噂を聞き付けた客が列を作るほどで、赤字を覚悟していた企画が、実に三千ドルもの利益を生んだときには、みんな奇蹟というのは起こり得るものだ、と互いの頬を叩き合った。

二度目は、リンダがコンビニに勤めているときである。

私は、夜食の足しにバーガーとカップ麺を求めに、これまで入ったことのない店にブラリと入ったのであるが、レジにいる子が学園祭で三千ドルの利益をもたらした子だと

気付くのに、一秒とかからなかった。リンダは、学園祭の企画の立役者であったから、翌夜の打ち上げに特別招待していたのだが、餃子屋から忽然と姿を消してしまった。

私は、第一印象の温もりを内に抱えたまま、二か月ばかりを落ち着かなく過ごしていたのであるから、二度目の稲妻が脳天を切り裂き、走った。

私が声をかけると、彼女は真直ぐに見返してきた。二人は、その夜一つになった。自然なことだった。リンダも私に特別な印象を持っていたのだと言う。

しかし、リンダがC国を逃れてY国に逃げ込んだ分子だという話は、ショックだった。餃子屋から姿を消したのも、追っ手の手が伸びて来たためであり、コンビニにもいつまでいられるかわからない、と悲し気に言った。

私は、リンダを離したくなかった。

「私の傍にいると、とんでもないことに巻き込まれてしまうわ」

「構わないさ」

「生きてさえいれば、必ずまた出会える。あなたは、これからという人。大切な将来がある身だから」

リンダは私が眠っている間に、去って行った。

その日を限りに、コンビニにも姿を見せなかった。

三度目は、震度六強を記録した地震のときだった。

未明に街を襲ったその地震は、老朽建物を倒壊させ、ビルのガラスを飛び散らせた。薄闇の中に数本の火の手が上がり、消防車がサイレンを激しく鳴らして行き交った。

私は、学期の中休みだったが帰省せず、徹夜でパソコンをいじっていたおかげで咄嗟に戸外に飛び出し、幸いかすり傷一つ負わずに済んだ。アパートは、倒壊こそまぬがれたが、大きく揺らぎ、壁に太い亀裂が無数に走った。

人々が、着のみ着のままで飛び出し、緊急避難場所にあらかじめ指定されていた近くのグランドへと、競って逃げた。私も、サンダル履きのまま駆けた。

戸外は氷点下に近い冷え込みの筈なのに、寒さを感じなかった。薄いシャツにズボン、それに素足という格好の体がひどく火照っていた。

避難所には、続々と人が詰めかけ、数千人がグランドに立ち、あるいはしゃがみ込んでいた。第二波、第三波の揺れが来るのをやりすごす必要があるのだった。

「すぐ近くが燃えてる」

「家に火が迫っている」

「怪我人を運べ。救急車だ、救急車を呼べ」

「道が陥没している」

「車が橋の欄干にぶつかって、何人もが呻いていた」

第二波の揺れが来た。間をおかず、第三波、第四波が来た。しかし、最初の揺れほどの強さはなかった。が、私た

ちにとって、揺れの強さが問題ではなかった。第一波の一撃で痛め付けられた建物や道路や人々の心は、どんな弱い衝撃にも脆かった。

泣き出す者、呻く者、わけのわからないことを叫び出す者で騒然となった。数千人の吐く息が、寒気のなかをもうもうと立ち上った。じっとしていることに耐えられなかった。何か動いていないと、すさまじいものに圧し潰されてしまうのではないかと思えた。

私は、避難所に備え付けられたハンドマイクを握った。

「大丈夫です。揺れの峠は越えました。しかし、しばらくは油断せずに注意して、推移を見守る必要があります。みなさん落ち着いてぼくの指示に従ってください」

私には何の権限もなく、地震についての何の知識もなかった。それでも、ハンドマイクの音が流れる間、人々は一つ、二つと深呼吸をした。

「揺れは、これ以上激しくなることはありません。大丈夫です」

確たるものなど何もないのだ。口から出まかせの言葉を、声高に繰り返す。私は文系の一学生に過ぎない。こういう危機に対する処方の心得など、まるで知らない。

しかし、パニックの入口から、新しい空気をほんの少しだけでも注入してやることが肝要だと、何かで読んだことがある。実際、数千人の人々の吐く息が少しだけ、やわらいだ感じだった。

ヘリコプターが頭上に舞い始めた。サーチライトの光が空を蛇のくねる姿よろしく過ぎっていく。警察や消防が次々に到着する。怪我人や老人たちが、担架で運び出される。第何波なのかわからない揺れが、間断なくやって来る。ときどき大きいものも来るが、だんだんそのエネルギーが弱まりつつあるのがわかる。

怪我人の列の中、目の前を一つの担架が運ばれて行った。ハッと来るものがあり、私はハンドマイクを手にしたまま、担架に飛び付いた。リンダだった。

リンダも私に気付いていて、唇を動かした。喉の奥にからまった細い声は、まわりの叫びにかき消されて何も聞き取れなかったが、頬には十分生気があった。頑張るんだ、と声をかけると、目がしっかりと意志を伝えて来た。

リンダは、私のアパートに住むことになった。リンダのいたアパートが倒壊してしまったためであったし、怪我の回復を待つためでもあった。

幸い、リンダの怪我は軽かった。両足を挫傷していたが、骨にまでは至っていなかった。アパートが最初の一揺れでひしゃげてしまったというのに、よくこの程度の怪我で済んだものだ、と医師が感心した。

「悪運が強いのかしら」

リンダは、足首の包帯を撫でながら何度も言った。

実際、同じアパートに住んでいた者の中には、圧死者も、重傷で口もきけない者も多くいるのだという。たまたまリンダは、深夜の勤務から帰って来たばかりで、眠りに入る前だったため、体が一早く反応したらしい。

父と母が上京して来た。

大丈夫だという連絡は入れていたが、ニュースで伝えられる惨状に、いても立ってもいられなくなったのだろう。

それでも、三日目になって上京したのは、交通機関の乱れのためもあったが、地方勤務だとはいえ裁判官である父、同じく学者であり一応名の知れた評論家である母の、学識経験者としての見栄が、意識の底で強く働いたのであろうことは否めない。

もっとも私は、父母の支配の手から何とか抜け出ようとしているところであり、父母の上京を望む気持などまるでなかった。

母は、入ってくるなり顔色を変えた。視線の先に、リンダがいる。

「意味がわからないわ」

しばらく間をおき、「同じ大学の人なの、そうだわね」、と言わんばかりの表情になる。母にとって私は、幼いときから常に〈希望〉そのものであったし、私も難なくその役をこなしてきた。

裁判官である父と、学者であり評論家である母との間に生まれた私は、相応するレベルを要求され続けて育ってきたが、彼らの要求を軽々と受け入れ、ほぼ完璧に近いかたちで満たしつつあった。

「そうだよ」と私が答えるより早く、「違います。C国の者です」リンダがすかさず答えた。

「C国。じゃあ、留学生の方」リンダが、小さく首を振る。

「それでは」

聡い母には、次第が飲み込めたのだ。父も、言葉には出さないが、失望の色をありありと唇に滲ませた。

「この人は傷付いている。アパートも倒壊した。しばらく一緒に住むつもりだ」

私は、母の前に立ち塞がった。

「本気なの」

母は、何か言いた気だったが、口を噤んだ。

「C国といったら、私たちのY国と敵対してきた元のW国の同盟国だ。おまけに現在のC国内では、亡命政権と革命政権との内紛が三年以上も続いている。これに関わることは、かなり危険だ」

父は、点けたばかりの煙草の煙を一筋吐き、長いまま灰皿に揉み消した。それを、何度も繰り返している。

「私たちはいいのよ。でも、あなたが将来この国を担おうとするとき、決してプラスにはならないわ」
「若いうちに異性の友人を得るということも、大切だ。しかし、相手がC国だとしたら問題は別だ。亡命政権と革命政権双方のスパイが、Y国にまで潜入しているということは、しかるべき筋には知れている話だ。ということは」
「あなたたちのことも、既にリストアップされている、と考えるべきことよ」
　母の声が、潤んでくる。
　私たちは、三日前の震災を見下ろせるビルの喫茶室で、一時間以上、同じ会話を交わしている。ガラスの向こうには、倒壊した建物からの出火で類焼したと思われる数か所の店舗が、手付かずのまま残されている。
「いいかい、お前には大きな未来がある。その器であることに間違いはない。お前は、着実に階段を上ってきた。いや、上り詰めることが出来る。そのためならば、私たちはどんな協力も惜しまない」
「あなたは、私たちの子とは思えないほど傑出している。学力だけでなく、多くの人を引き付ける魅力を兼ね備えているわ。そのことは、これまで実証済みよ、何度も」
　私自身、自分には何か異なった次元からの力が働いているのではないか、と実感することがある。これまでの、いくつかの事例。例えば全国の高校生の意見を発表する場である、教育省主催の「二十一世紀を創出する」という論文と弁論とのコンクールの優勝の際は、何かの力と言葉が与えられ、それをただ口にしたに過ぎない。
　大学に入っても、並みいる強者連を押さえ、学生委員会委員長に選ばれ、全国の大学連合の委員長にも満場一致で選ばれている。
　入学してまだ二年でしかないが、大学当局の制度さえ整えば、今の段階で卒業認定を与えることが出来るという話も、大学側から来ている。先日は総長にじきじきに呼ばれ、進路についての話題の中で、「将来大学に止まることを勧めようと思ったが、君はその辺りの域をはるかに越えているようだ」との、含みのある言葉をもらって来た。
　そんなことを考えながら、一方で、眼下に広がる震度六強にさらされた街並みに、早くも日常の人の波が戻りつつある様を、眺めていた。

　アパートに戻ると、リンダの姿はなかった。
「今回のこと、とても感謝しています」
　との書き置きが残されている。予想していたとはいえ、胸が穿たれる思いだった。住む場所を失い、傷を負ったリンダが、この街のどこに身を移すというのだろう。
　私は、まだすぐ近くにリンダが蹲っているのではないかと考え、アパートの周囲や、駅や、元彼女が住んでいたというアパートの跡などの心当たりを訪ねてみたが、発見することは出来なかった。
　あのとき、どうしてリンダ一人を残して父と母の後を追って出たのだったろうと悔やまれる。リンダの前に立ったまま、頑として父母を遮ってしまえばよかったのだ。
　父からも、母からも、電話がひっきりなしにかかり出し、手紙も届いた。
「よくよく、考えることよ。これは大事なことなの。あなたにわからないわけはないでしょう。あなたと一人の異性というだけの問題じゃないのよ。あなたの大切な未来、いいえ、命にもかかわることなの」
　主流派として名をなしている母も、こういうふうに出る。リンダの属するであろう側が、母のかねがね述べてきた論旨に近い主張を掲げているにもかかわらず、である。父に至っては、私の近辺に警護の依頼をしたとまで言う。
「彼らは、いつ何時、ことに及ぶかわからない。つまり、お前を盾にして身を守ったり、人質として自らの逃走を企てたりしないとも限らない。彼らは兵士なのだ。街の人込みの中に紛れ込んだ、筋金入りのゲリラなのだ。組織のためならば、恋人を裏切ることなど正当なことだし、組織のために敵を恋人にすることなどわけもない」
　という電話を毎日聞かされる身になると、たまらない。
　一般論としてはわかっても、私はあの稲妻にも似た衝動が結び付けてくれたリンダを、懸命に探しているのだ。ゲリラであろうと、スパイであろうと、私はリンダの心の内に、なんのわだかまりもなく入って行けるのである。
　本当に身辺に何者かの影がしのび寄るのを感じる。父が差し向けたY国の警護の者か。あるいは、C国に絡む者たちであるのか。
　郵便受けに得体の知れないメモが入っていたりもする。
「空、パナマ帽、カルデル、虹、盗賊、水筒」
　てんで意味のわからない暗号まがいのメモが、さり気なくドアに落とし込まれている。それも、朝刊の中からポトリと落ちたり、あて名のない封筒に入っていたりする。
　あるいは、外から帰ったときには何もなかったのが、微かな気配を感じドアを開けると、ドアの隙間に差し込まれたメモがスッと落ちることもある。
　さすがに、私も気持が悪くなった。メモを掴み、一度は交番へ走りかけたこともあったが、途中で思い直した。
　その間、父から、母から、ひっきりなしに電話が鳴り、手紙が届けられる。
「思い直してくれたとのこと、ありがとう。今回は随分な干渉だと映ったかもしれないけれど、遠からず感謝してもらえる日が必ず来ると思います。異性であるならば、もっとすばらしい出会いが待っているに違いありません。将来

を見据えて、今はしっかり基礎作りをしてください」
「何より、あなたを信じています。あなたほどすばらしい若者は、Y国には多分、他に誰もいないでしょう。真直ぐ伸びてください。いいえ、きっとそうなります」
という文面を斜めに読み、机の上に放り投げる。

街中には高速道路網が張りめぐらされ、動く歩道である架橋が道路上に渡されている。技術というものはどこまで進むのか。先日来の地震の跡は、一か月と経たないうちに払拭され、以前にも増して高機能を備えた街に変貌した感がある。

第三次の大戦が終わったときには、現在の街のあたりは焼け野原であり、砂漠に見まがうばかりだった。そこに、一年も経たないうちにビルディングが建ち並び、電波が通い、頻繁に車が行き交う日常が戻った。

街は眠らなくなった。

しかし、その街の片隅では、十二、三歳の子供たちまでが金のために身を売り、男同士、女同士で絡み合う者もいるという。

一方では、特命を帯びた科学者たちが昼夜明かりの消えることのない部屋で、ＤＮＡを操作しウシやヤギの変種をこしらえたり、光速に近い乗り物の研究に没頭しているという。噂では、不老不死の薬の研究に確かな見通しが出来、遠からず販売に至るということらしい。

Y国を繁栄に導いた大統領の地位はいよいよ揺るぎないものになり、世界をほぼ手中に収めており、つい半月ほど前、金箔を施された第一タワーの竣工が賑々しく祝われたばかりだ。

しかし、街の中枢では、権謀術数の限りを尽くした抗争が繰り広げられており、あらゆる国々のスパイが行き交い、あるいは要人となり、あるいはマスコミ関係者として、あるいは大臣や大企業の社長となり、秘書となり、日夜暗躍しているともいう。

一歩街を外れると、約三か月の戦闘で決着を見た、第三次世界大戦の爪痕が生々しく残ったままであり、また場当たりの開発で樹木を失った山々が広がり、戦闘機の離発着する要塞が地下深くに根を下ろし、ゴミ収集場では人に食い散らされた家畜の骨が、折からの風に音をたてて崩れ、実験で命絶えたモノたちがそのまま累々と横たえられ、漿液を流し、銀蠅の棲み家となっている。

少年、少女たちの犯罪も目立つ。彼らは、通常はおとなしい気持のよい子だ。それが、突如変貌する。気が付いたときには、彼らの後ろに、五人、六人と、猫などと同様に惨殺された少年、少女たちの骸が転がっている。

私は、近い将来、この国の幹部として働くために、欠かすことのできないチケットを得るための準備を、ひたすらしているということになるのであろうか、と首を捻りながら考えることがある。

リンダは、左頬の痣の跡を隠すこともせず、架橋に立ち、上って来る朝陽に気持よさそうに胸を反らした。

私もリンダの横に立ち、朝陽に向かった。

考えてみれば、こんな早朝に陽に向かうことなど、生まれて初めてのことだ。

眠ることを失った街にも、変わることなく陽は上り、清々しい気を運んでくれている。私たちは、今日を限りに、二度と会うことはないと決めている。決して、父や母の望みどおりになる、という意味ではない。

リンダは、昨夜遅くアパートにやって来た。私たちは何も言わずに強く抱きしめ合った。

リンダは、午後の飛行機で母国に帰ることになっていると言う。母国の切迫した事情が、彼女を招いたのだ。

一方、どういうふうに情報が入ったのか、父と母がリンダと私のことを嗅ぎ付け、上京して来つつあるという。

私たちは、アパートを出て架橋まで歩いて来た。この架橋の上に二人で立つことが、リンダとの別れには一番ふさわしいことだと思えたし、そうなることに決まっているのだ、と何故か考えたのだった。

上り始める太陽の赤さといったらなかった。陽は、街中の音を払い、しんと澄んだ空気の中を、まばゆいばかりに輝きながら上ってきた。

「言葉もない」
「そうね」
「何かの始まりのようだ」
「きっと素晴らしいことよ」
「別れても、これからずっと会っていることが出来るに違いない気がする」
「つかまることも、銃殺刑も、今は何も恐くない」
「変だな」
「変だわ」

私は、リンダの目を見た。リンダは、私の目を真っ直ぐに見返してきた。

背後で、二人を呼ぶ声がした。父と母である。

父と母が、架橋の下から見上げている。

「早まるんじゃないぞ」
「ごめんなさい。悪かった。私たちが悪かった。だから、待って。待ってちょうだい」
「今行くからな」
「そのまま、そのままでいて」

父と母は、たいへんな勘違いをしているのだ。

「そんなことじゃないんだ」と叫ぼうとしたとき、突然母

が頓狂な悲鳴をあげた。
その母の悲鳴が、間を置かず悶絶の声に変わった。
父や母の立つ地面が、いきなり裂けたのだ。裂けたと思ったときには、地中の何かに火が回ったのか、轟音とともにあたりが火の海になった。
地面が裂けただけではない。うねり始めた。地震だ、と気付くのが一瞬遅れたのは、裂けた地面に挟まれ動けない父と母が、躍り上がる火に包まれる様に目を奪われていたからだった。
地鳴りがした。遠くから、巨大な獣の群れが、足を踏み鳴らして押し寄せて来るかという感じだった。
人々が街の広場に転がり出て来た。その口々が、何かを叫んでいる。何かを喚いている。腕が、手が、中空に伸び、もがき、何かにすがろうとしている。
と同時に、街のはるか遠くに見える山々が、一斉に火を噴いた。赤い溶岩が、上りかけている陽を目がけて噴き上げ、空がにわかに暗くなった。
竣工したばかりの第一タワーが、ビルディング群が、揺らぐ間もなくいきなり崩れ落ちる。高速道路が、橋が、おもちゃみたいに揺られ、潰されていく。空を青白い光の束が過ぎった。二十本も三十本も、狂い踊り、過ぎった。落ちている針一本さえ見逃すまいとするかという執拗さで。
「緊急指令。緊急指令。全国民は、直ちに六六六の位置に付け」
デジタル放送だった。放送というより、耳の芯に打ち寄せる信号だった。六六六とは、かねて定められている緊急時の対応の、最も過酷なものを意味する。
これが誤作動ではない限り、六六六が発せられる場合は、地下シェルターへの避難の猶予もなく、迎撃ミサイルの発射も叶わないという事態に陥ったことを示す、およそあり得ない想定外の指令だった。
それは、指令を発する者もなく、どういった攻撃からも幾重にも保護されているという、秘密シェルターの操作さえ不能に陥ったことを告げるものだった。勿論、指令を受ける者もないのであるから、「六六六の位置に付け」という言葉自体何の意味もなさないのであるが、シェルター自身が自らを破壊する寸前に発する最後通告として、プログラムが組み込まれているというものだった。
私は、リンダを見た。リンダは、もて遊ばれる架橋の縁にしがみつき、青ざめきった顔を見せた。
と、何かの力で、ありとあらゆるものがズンと引き下ろされて行くのを感じた。
あっと思う間もなかった。空からすさまじい勢いの濁流が降って来た。海水が流れ込んで来たのだ、と考えたとき、私の目は渦の中心に引き込まれていくリンダの姿を、一瞬とらえることが出来た。
（了）